2024年度　日本の持続可能な酪農研究会

～海外の事例に学び今後の取り組みを探る～

一般社団法人 Jミルク

報告❶

IDF World Dairy Summit 2024 in Paris

酪農家円卓会議（DFRT）／酪農場訪問

報告者：

中 村　俊 介

（農業組合法人 高塚酪農組合 高塚牧場 / 熊本県）

2024年度 日本の持続可能な酪農研究会

2025. 2. 27.

IDF World Dairy Summit 2024 in Paris

酪農家円卓会議（DFRT）／酪農場訪問

農業組合法人 高塚酪農組合 高塚牧場

（熊本県・人吉市）

中 村　俊 介

（農）高塚酪農組合 高塚牧場の紹介

- **所在地**：熊本県人吉市
- **労働者**：理事3人、日本人従業員3人、外国人実習生3人、特定技能実習生1人、 日本人女性のパート1人
- **乳牛頭数**：経産牛約240頭（搾乳牛185頭、乾乳牛40～50頭）
  ➡搾乳牛全導入、ETによる和牛繁殖
- **年間出荷乳量**：年間乳量2300トン（一頭当たり平均年間乳量9トン）
  ➡フリーバーンのパラレルパーラー
- **自給飼料生産**：完全購入
  飼料稲（WCS）や、おからなどの食品残渣を給与
- 2022年より全国酪農青年女性会議の委員長を務める

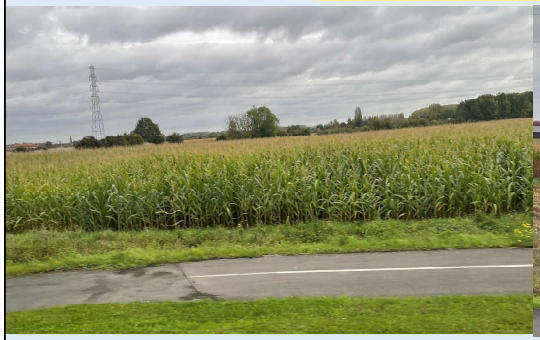
酪農場視察

1軒目：ジル・デュラン牧場

2軒目：クリスティン・デルフォートリー牧場

フランス農地の風景

フランス農地の風景



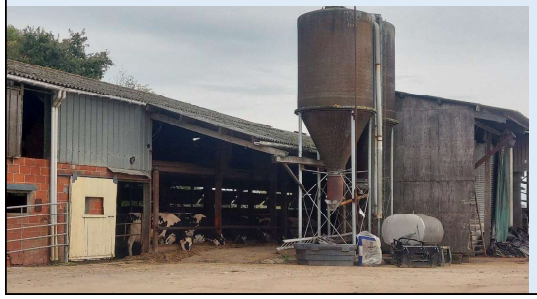
特長： 生産効率の良い平らな農地

- 広大な草地や畑
- 風車の利用

酪農場視察：ジル・デュラン牧場

牧場概要： 搾乳牛80頭、圃場面積86ha、年間生乳生産量800トン、
ダノン社に生乳出荷、6次産業実施

主な特徴： ①自給飼料生産、②持続可能性・牛乳の付加価値、
③生乳取引・6次産業への取り組み



特長①：自給飼料生産

- 安定した自給飼料の確保
- 飼養頭数が農地面積によって制限

特長②：持続可能性・牛乳の付加価値

- **目標**：
  生乳1リットルあたりの温室効果ガス排出量を20%削減すること
- **食料供給**：
  2669人分の食料を提供
- **雇用創出**：
  6.2人分の直接・間接的な雇用
- **生物多様性の保護**：
  40ヘクタールの生物多様性を維持
- **カーボンフットプリント**：
  牛乳1リットルあたりのCO_2排出量は0.98 kg
- **炭素貯蔵**：
  年間で0.03 kgのCO_2を貯蔵

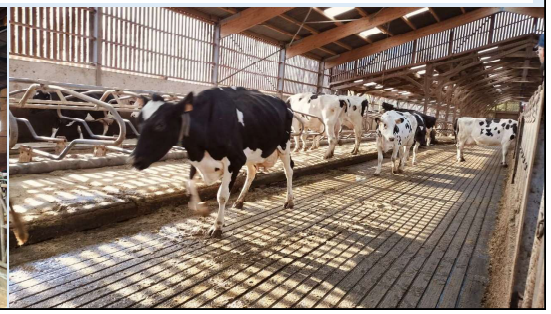
特長③：生乳取引・6次産業への取り組み

- 生乳出荷量に制限
- 乳価
- 脂肪よりタンパク質が高値
- 出荷制限による生乳の利用
- 消費者との関わり

酪農場視察：クリスティン・デルフォートリー牧場

牧場概要：搾乳牛140頭、圃場面積80ha、年間生乳生産量1500トン、ダノン社に生乳出荷、酪農教育ファームの実施

主な特徴：①自給飼料生産、②後継者問題、③アニマルウェルフェア、④酪農教育ファーム、⑤コントラクター利用

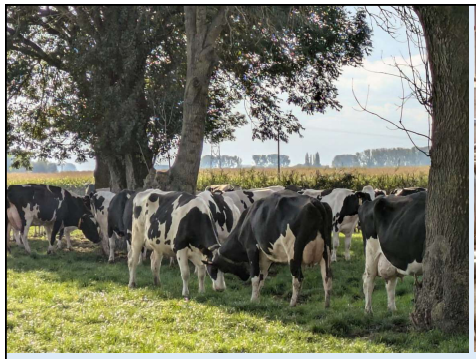


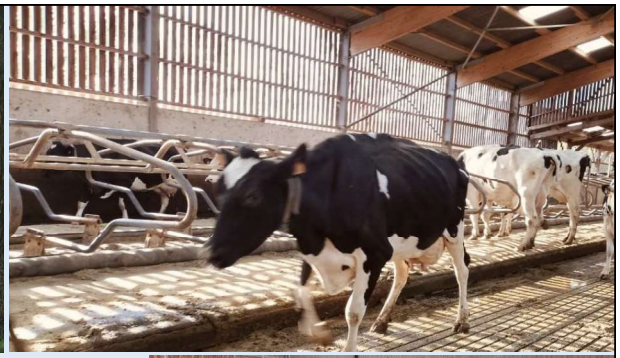
特長①：自給飼料生産

- 土地のほとんどは借地
- ジャガイモ生産者との競争
- 賃金の高騰、高額な借地権

特長②：後継者問題

- 現在の主人（経営者）が引退すると、新たに借地権を得る事が必要
- 設備や建物だけでなく、土地も含めた高額な費用が掛かる
- 農地がないと牛が飼えない（牛1頭につき1haの制限）



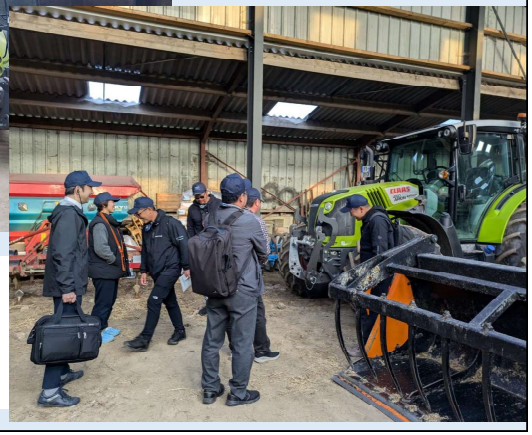


特長③：アニマルウェルフェア

- ウォーターベッドの利用
- 十分なスペース
- パドックへの放牧

特長④：酪農教育ファーム

- 消費者、子ども達の酪農への理解活動
- 収益

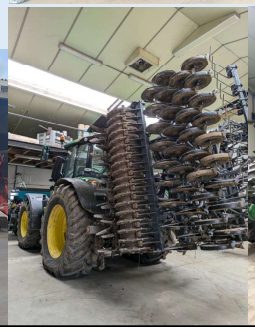


特長⑤：コントラクター利用

- 収穫用機械など共同で所有

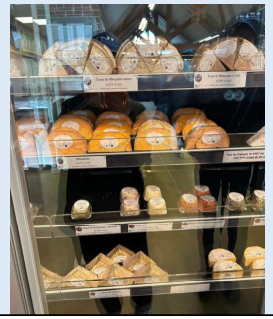
その他訪問先①：
キューマ(CUMA)

- 農機のレンタル・リース
- フランス全土に点在
- 近代的で最新の農機



その他訪問先②：
オ・パニエ・ヴェール(Au Panier Vert)

- 地元農家が協力して創設
- 地元産農産物の直売所
- 食育活動への意識



各農場のまとめ

①ジル・デュラン牧場

- 安定した自給飼料の確保
  ⇒自身の農地を所有
- 乳製品加工販売
  ⇒バターやバターミルクなど
- GHGに関する取り組み
  ⇒牛乳1kgあたりのカーボンフットプリントなどの算出

②クリスティン・デルフォートリー牧場

- 今後の借地権の問題
  ⇒農地のほとんどが借地
- 後継者問題
  ⇒設備や建物以外にも、土地も含めて非常に高額な費用
- 酪農教育ファーム
  ⇒酪農業への正しい理解を伝える

両牧場の共通点

- アニマルウェルフェアの取り組み(パドック放牧など)
- 環境対策への積極的な取り組み(たい肥問題など)
- 自給飼料生産基盤の充実(高い自給率)

日本との比較・所感

1. 日本の酪農の現状との比較

①共通点

- 酪農教育ファームなどの食育活動
- アニマルウェルフェアの配慮 ⇒ 牛に自由の時間を与える事や牛舎内のストレスの減少
- 後継者不足

②印象に残った点

- GHG排出量測定ツールの利用 ⇒生乳1kgあたりのカーボンフットプリントが算出される
- 自給飼料生産 ⇒ フランス国内の自給飼料生産基盤は高い
- 地域農業全体での農機レンタル・リース組合の利用 ⇒ 機械導入コストの削減
- 環境に配慮した堆肥散布 ⇒ 飼養頭数と農地のバランス
- 生乳取引 ⇒ フランスでは酪農家と乳業メーカーとの直接取引により生産量が抑制される

2. 所感

- 生乳取引にGHG排出量などの基準を導入することは、日本では不可能に近いのではと感じた。その基準を守ろうとすれば、生乳不足が起こってしまうのでは、と不安に思う。
- 海外から学んで取り入れる必要はあると思うが、日本に適したものを取り入れることが大事。